

学校だより 希望の鐘

ひとつの鐘は、いづれどこかにひびく

希望の鐘を
鳴らして



八 戸 市 立
小中野中学校
平成29年9月14日(木)
No.95 文責：校長
工藤聡

どんな子どもも、いつかは誰もが必ず「大人」になります

私には、息子が一人います。子どもは、この息子だけです。私の名前が聴で「耳」が、嫁サンが睦子で「目」がつきます。子どもが生まれたら、「口」がつく名前をつけようと思っていたので、迷わず「啓（ケイ）」にしました。次に女の子が二人生まれたら、ひらがなで「はな」と「まゆ」にしようと思っていました。これで顔の部位が完成ですが、かないませんでした。ただ、私にそっくりな女性だとしたら、親として申し訳ないので、それはそれでよかったと思っています。

息子は、勉強はそれほどではありませんでしたが、運動はかなり得意で、中学生の時（下長中）は100mとリレーで2年連続県大会に出場することができました。高校では、男女共学となったばかりの聖ウルスラ学院高校に入学し、野球愛好会をつくり、硬式野球部に昇格した後、主将も務めました。

その息子が、3年生への進級を目前にした3月、「左手の親指が動かない」と言い出したのです。硬式野球では、石のような硬いボールを、グローブの真ん中や網の部分で捕り損ねて親指のところにあてると、その衝撃で腕の筋が切れて動かなくなることもある（一般に「バネ指」と言うそうです）そうなので、それではないかと思っていました。治療をして長引くと、9人にも満たない野球部でしたから、夏の甲子園予選が終わるのを待って手術することにしました。そして、秋になり手術を前に精密検査をしたところ、どうやらバネ指ではないということがわかりました。さらに、いくつか病院をまわって出た結果が、「筋萎縮症」という病名だったのです。この病気は、筋肉が徐々に萎縮する病気で、最終的には死に至るという難病です。その頃、沢尻エリカさんが筋萎縮症の女子高校生演じた「1リットルの涙」というテレビドラマも放送されていたので、まさか自分の息子が死んでしまうのではないかと、私も大変苦しい思いをしました。

その後、さらに精密検査を重ね、最終的には左腕のみに障害が出る病気（頭を支えている首の骨の間隔がせまいたため、その中を通っている左腕の神経を圧迫することによって起こる）ということが判明しました。そのままにしておくと、左腕全体がマヒして動かなくなるかもしれないということもあり、高校3年生の12月に手術をしました。首のせまくなった骨と骨の間に、腰からけずった骨をあてて広げ、それをワイヤーで固定するといった大手術でした。幸いにも手術は成功し、翌年の4月には大学に進学して、現在は仙台市内の人材派遣のような会社で働いています。50以上あった左手の握力は20未満になり、重い荷物を持つと左手がツルようですが、それでも左手が動かなくなったり、ましてや死んだりすることに比較したら、私には何でもありません（息子は苦しいところがあるのかもしれませんが…）。

息子を例にとりましたが、この世の中にはいろいろな人がいます。比例して、子どももさまざまです。私は、親や先生の言うことを一つも聞かず、好き勝手なことをするわがままな中学生のことを「クソガキ」と呼んでいます。乱暴な言い方ですが、親しみもこめていうことでご理解ください。私の息子も「クソガキ」でした。私はかつて「クソガキ」だらけの学校にいた頃もあります。当時は、先生をやめることばかり考えていました。親でも先生でも「クソガキ」を目の前にすると、一生そうなんじゃないかと暗澹（アンタン：前途に望みを失い、絶望的なこと）たる気持ちになるものですが、子どもは一生「クソガキ」ではないのです。必ず少しずつ成長し、いつかは自分が「クソガキ」であったことすら忘れ、立派な大人になっていくのです。

私も、息子の「クソガキ」ぶりを目にして、ガッカリすることがありました。しかし、息子が死ぬかもしれないと思った時、それがいかに“ちっぽけ”なことなのかがわかりました。そこから、生徒を見る目も変化したと思っています。大人や親は、子どもに素晴らしい結果を求め過ぎだと私は思っています。子どもにとって何が幸せなことかを考え、子どもの目線で一緒に生活していくことこそ、子どもの成長を促すと同時に、親としても楽になることではないかと思っています。

（今日の内容は、生徒というよりも、保護者の皆様方向けになってしまいました。今年の7月8日に行われた1学年－現在の2学年－懇親会での話の内容の再掲です。ご了承ください。）